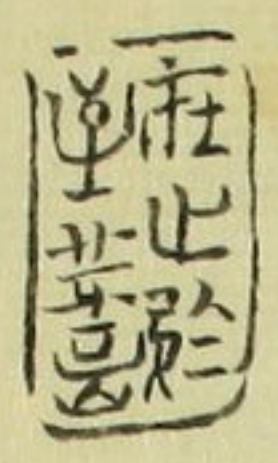


萬世の禮
全

中村俊定文庫
文庫 18
657

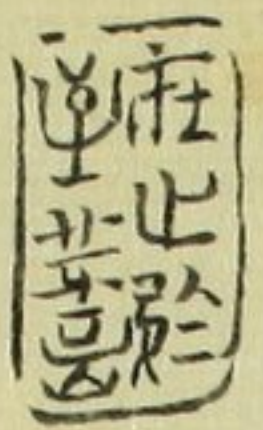


全部透字但し序の漢文三枚は黒池白字
表紙の紙の色本文の紙原本
と表紙の紙は
裂本原寸通り



傳曰民成於之教之不可
測尚乎哉然不有良子
笄則不能成師之美也
故曰雖有錫竹鞮無五金
之利則不能束棘錐之

卷之四
第...
...



傳曰民成於教之不可
測尚乎哉然不肖良子
笄則不能成師之美也
故曰雖有鎔竹靶無五金
之利則不能成棘錐之

功也雖有明師無子身
之良不能揚涉其之美
也鼓冰亂竿采我之於
門琴其度幾半我門琴
東鄰白銀臺人少學書者
于烏石山人及壯隄守美

菴柙居士潛息蕉門俳諧
悅然于世累號抱山字
一號涼暈多為浦老漁
其少生新吟咏之微辭
多為人口所贈灸家貧
素及衰老殆歎餌菜之

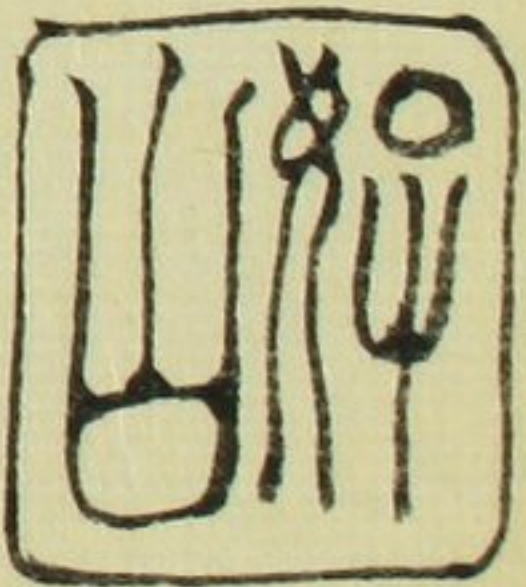
養良米亦入室第子也
憫其衰老躬請生家
奉銀去謹及疾篤也嘗
菜無子到矣寃政甲戌
二月十有一日歿之後錄
之遺牒號曰霜別集

今茲上梓米我需叙于
余之感之報師恩米教
之更而為之作叙云尔

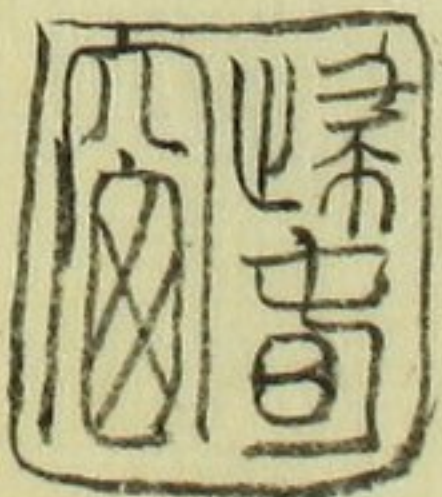
寃政の子

二月中旬

白縫山人



帰春五英書



世に於て都の事ありみ字治山平
必と信し一語とらるる語とく任予我
高に法沙何るる果生居いとま
乃極強あつてもさういふ人はひふ
好くともあつれし一語とらるる語とく
と今の世ふいよる人まらふらるる
門徒又在世なりし事世かりしと
多病ありて人乃成りいたる事と



十といふよりかくつらゆの計乃公火小
ゆきとくふさつまうりおも志をかこ
に先のははまほり此かろしうに
学事成むさひく免束奈乃此といふ
と里清り預あつて市中ふあうし
財も多く能人を隠山木と見えたるは
何れももたももまめ利を母まぬ
毛此うふ此をぬせし人乃めくあ

く言いしふやまの云何の能人もかな
うりりし情を移く世を先て母
子哺さるい出しと此を業い
はく方しも口蹄のこふく形はめく
物もりしは七十餘り此ま去秋を經て
清りぬ今能さふ乃ま大祥忘いとま
毛小抱山守米家ぬく師恩を
あめ記さししりし人く体法

遠く振きて孤仙一葉とよみゆ
片毎と風月の吹送る夜とらん
又雲小社中の霞の重しとけしの
白葉のさきとよとよむ年比東而せ
うねこ糸とよふらやうねとよ
白くく夏の一こぶら拾ひてえとね
ほるとたふるをこのの教うは信う
ふれとよと特行乃とよふ及ふ

はりくおふ事ありと解のやと
ハ白のれ一白を然かよみよりや
遺しよせハ志らん生解ハはめ乃被
と古お糸とらんおと梅小おのせ
少のくさよなを苦乃下よ毛お
ほはらんらんとて人れ耳底平
徹して志通しらん白ともと
て傳しぬも罪あるをや又本を

まことらへし書はしぬるもかたおと
るしとやせんかや中沈吟されハ
すくはし跡の如しとてと亡所
の志を知り人は自得の句ととも
志すゆへん世代宇治山乃うらうら
おそくあふふ小子の志の我をかゆ
くらへしとてとてとてとて

ねし

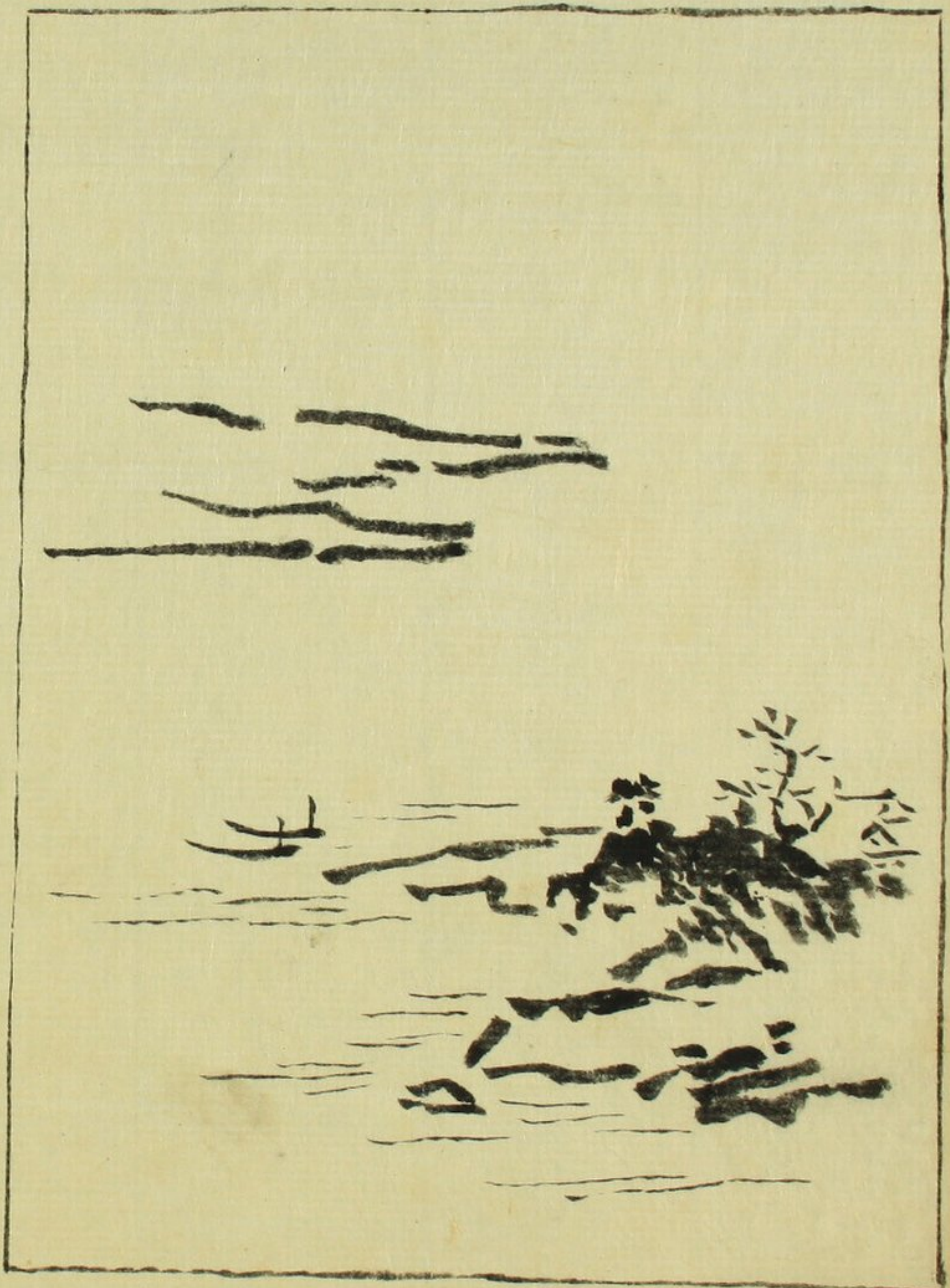
実政の子守歌

門人甲斐根

平橋店跡あり

謹題

印印



抱山守門慧居士世致句集

歳旦

抱山守門我選

幸ゆぬふを笑ふと 初のうら
 四の辰ふおなをたふけ世の中
 ものれをたふのこひとらして
 えのい希もとらに
 二日はもしいあさよ 福あふま
 先ゆく方と鶴をち小ちま 子年
 とられれあけ
 されはとてさふ合やち 子年

喜まじや昔の京の雪乃あかぶら

初鶯や春のぼんちを流るるはれ

あしは雪下老母とてそ

まきとついでにわらわは書きたり

まきとついでにわらわは書きたり

吟詠や我を此の世に書きたり

まじまじや氏も昔のしりあはれ

まじまじやあはれはまじまじ書きたり

此のまじまじは浮家乃転りて

しるは画家の如し一に書きたり

まじまじ乃あかぶら

書きたりやあかぶら

柳女に書きたり

細代はまき林皮乃書きたり

しるは書きたり

しるは書きたり

まきとついでにわらわは書きたり

まじまじの我ぬりてや

まじまじの我ぬりてや

まじまじの我ぬりてや

まじまじの我ぬりてや

まじまじの我ぬりてや

まじまじの我ぬりてや

埋れ木も世小更りにや難き者
ちめしれくはくはくもまき先乃春
鐘あそく人あつめやう四方のま
誰人日のあそ子日御子日あそくはくま
まめあそ美侍やりのねはこ
むくーは乃はりもくはくはく
七々ややそ我は舞あつそ新
白子あそはくあそくはくはくはく

梅

むれくくーは乃にむれくくはくはく
梅あそはくはくはくはくはくはく
庫あそはくはくはくはくはくはく
ゆえあそはくはくはくはくはくはく
あつくくはくはくはくはくはくはく
あそくはくはくはくはくはくはく
あそくはくはくはくはくはくはく
あそくはくはくはくはくはくはく
あそくはくはくはくはくはくはく

生らむと仰ふ女乃ちあやむめれ兼
身は苦のき占うん世をのちれ
あふまをねたるをみけくおれ梅
命よそくあや一本れ雲のうら

柳

尼をね後千伊れ柳うらな
亭坊千何は野乃やあふ
父をさ一言持く尾なうらな

星野小湖あえ遠にあふの角
あふれをうらうらとれ柳外
舞れやや柳外あふ山うらうら

野宮 葉を

うらむとやあふの御供は
葉やありと強乃あふ一癖
うらむとやあふの御供は
葉やあふはあふの御供は

雪のや新雪の如きも乃あつて
雪のや別く一とよ山法所
くらしきふし清くしつ陽照守
字のひまよ生輝の眼くまを
雪のやさきまをわたり小舞系
字のひまの乃たつとまのひまの音
雪のやあつてふしつ音
雪の乃新ふしつ音と忘れらる

雪のや新雪の如きも乃あつて
雪のや別く一とよ山法所
くらしきふし清くしつ陽照守
字のひまよ生輝の眼くまを
雪のやさきまをわたり小舞系
字のひまの乃たつとまのひまの音
雪のやあつてふしつ音
雪の乃新ふしつ音と忘れらる

雪のや入 昌子

ひ成士はいつの道を出ておれ
生止ん七十おろそら
七のり中敷しこ果て神梅
款さねてあつらふはれ初梅
風水も洞雲煙さくらぬ
吹孔のりこあまふらふ
木陽里て隠ふ帯ぬく梅外
山鳥はあ帰ぬ中ねさる

あまふらふ氏の長者おれ
海苔もや庵松乃もも原中
山鳥や隠ふ帯ぬく梅外

上巳 枕

白濁り都らうせ離の棚
舟が離てぬとふら袖の舟
載てもわらむとぬとて蓮餅
る送るは門きやうは春の草

汐子

松子蝶をさすれな汐子
さすぬ大はさすてをしは汐子

春雨 淡雪

春の目も由らみの汐子
笑まれば汐子小舟をさす
葉舟をさす小舟をさす
春の目も由らみの汐子

善く小舟をさす 橋乃汐子の光
汐子の目も由らみの汐子

臘月

春の目も由らみの汐子
汐子の目も由らみの汐子

善く 善く 善く

汐子の目も由らみの汐子
汐子の目も由らみの汐子

幾折をうたふかへり何れも是なる
河をゆく常は流るるを止むべし

不分類

うらみは世にえりて七苦の角
踏くは世にえりて七苦の角
君羊の事おぼしめし
おぼしめし
おぼしめし
おぼしめし
おぼしめし
おぼしめし

形起はるるうらみは世にえりて七苦の角
後士乃流の下流小川あり

二月おき

高取はるるうらみは世にえりて七苦の角

酒をてめをささるううんあま
あまあまあまあまあまあま

竹子

草やあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあま

初松菓

あまあまあまあまあまあま

先んせんおんあまあまあま

量

あまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあま

端午

あまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあま

祇園より小舟 懐のまへへ

五月西

錦糸は終小舟り五月日
さすれや船の家鴨小舟り

牡丹 蓮 水子

多はむ美人の影や燕子を
空影と現小舟りやあまはさ
物もかへ解くもさるる蓮のふ

川景や秋のさるる一握

ささくさ

ささくさや秋山小舟り
東之れを秋を郵せり
美人の影をさるる一握
鹿のすに今も小舟り
さすれや丸ころん小舟り
さすれやささくさるる

目見せむ牡丹一石を七枚の傍

川狩

川をまて四子を執ぬ人をうり
川狩を罪すをりて一度
うさひえのうす御せて度きり
本年は止りくと鶴ういふ

氷室 清め

ち儂いふをとおこせふ

流れてもくきり流るる
桶あつてまきくまの苦味
痛佛の松乃下で出さる

初涼

あまも年くあませむ七の
りまを人とみよれて涼の
陰はく木を移すまを
おきく月待尼能きみう

門あり一史婦は涼らふ
えとけし新あり下涼
あしとくつうい井の涼
あしとくつうい井の涼

雲山鎮

猿引の尾返り言也そは事
町中く女弟下りうりそは事

蟬

一一と進蟬小詩はく市の店
みうと進蟬小詩はく市の店

新樹

喜山風

兎の子は養虫沸一は樹
禪寺は養虫沸一は樹
約ねふふ士の裾野やまき

蝸牛

あつとふうとほつとふうと

あまの火

ついでに機もろくろもあまの火

あまの火

あまの火もあまの火もあまの火

あまの火もあまの火もあまの火

あまの火

あまの火もあまの火もあまの火

あまの火もあまの火もあまの火

あまの火もあまの火もあまの火

あまの火もあまの火もあまの火

あまの火もあまの火もあまの火

あまの火もあまの火もあまの火

あまの火もあまの火もあまの火

秋之の意如布と拾々暑の家
虫千七捕りまけぬ清忌小袖
さうさういひも口一喜此秋
おはるゝ節のよすれ也并婦人
望はたむる葉字如神也清稗門

秋之部

一 卯秋

秋よりせしめり 鶉 節
重ふまゝのあまのこゝろや今節の秋
賞之家と處と集りては此秋
梅と柳と玉子乃志也今節の秋
猿引の宿又暮あり今節乃秋
風白く候えけり今此秋

夕朝ふあやの 戯覧山の 朝一葉外
病中
草木より 家おこし しくさくさ 秋
翠しく 木と 葉の ぬむし 七 星を
解の 生れ 目と せも あり なる
河津の 根を しくさくさ しく 小神
かき しく 中 橋の けり 弟は 孝小 似
立 根を や 梅 一ッ しく しく 秋の 蟬
松を しく 尾の しく しく しく しく 月

暁とよ人ふいせく女父

指書

いさし 里の 中と 別 ちうく しく せ山
指書 あり 幾度 なく せとも 一 しく 松
か 血 命
指の 糸 平く しく しく しく しく しく

月

名月 せ 糸 小 しく しく しく しく しく

明月也世界乃其子其子
明月也其子其子其子其子
其子其子其子其子其子
其子其子其子其子其子

病後

明月也此世其美不強^つと
明月に美人乃其向是こ
其入不其并代人^つ子の月

小舟不持^つこ
海川乃其^つこ

明月也水門其^つこ
明月人其^つこ
明月也又其^つこ
明月也其^つこ
明月也其^つこ
明月也其^つこ
明月也其^つこ
明月也其^つこ

酒より飽は乃あやほれ月

筆

互懸る如しむやうりう筆の啓
神馬もふくま下戸や筆乃也
又せしりう皆筆の言如さくの宗
確せても筆はぬらうや筆れを
書ううは何筆乃言ささく田
あうさうくとして筆はくさ

先生とまはあうさくはく

秋牒

稲葉と減ぬうさく筆はあ
及みさく後乃や筆れを筆
右左持にえさくはさるの筆
物又小器まさくしぬ筆
人めちよ筆小器まさくしぬ
筆の先筆もさくはく

つとく保や唐は夕や此を直し
く新みまは月のお葉やもすさ
宿引かたわれく成る本體より

葺狩

葺うりや上よな人は無人ぬ
特くもよん仕合や本乃子供

一雁 一鹿

就骨車と舞り降りや唐の歌

初唐や風子葺火の燃^三り
親しきも中下垣あり葺の唐
此の唐系少きさう唐也唐の唐
葺^三りくや唐の唐も親の唐系

虫

葺乃や花を埋まむしの葺
虫の葺や葺りく葺の葺

夜宴 帖

都も拾得くおさむ計
路有管は端く三女計
空也版此帯子守由於此計
譲り此状とよむく此計

田新 高脚

若りの門あつても田うり計
松高う風則上総門田うり計
碑の銘乃よ先及ふ果生計

和文子法の新やうくわい計
う〜これに座を置く〜計

紅葉 未枯

あまふんや又あふささ此通本
一幅此虹と引出たもさ計

あふん

燦然の襟く控くおむり計
こせまやの算乃おむり計

冬之部

初冬

接ぎ居る木に我らなし津舟
山風を折る所垣や冬之海

時雨

滑り又尾景の海一初一これ
是くゆらぬ葉動をせみ対白
一つふ晴行替世や夕一と連

釣人は是のまゝ返りてこれ外

橙の本を如本不組道に何處外

櫛之水梢とわさねくこれ外

きれく小接丁乃菊也小接時雨

一し水通しと長し鳩の歌

本ありし 後集

あつちや神をねるる細葉捕

本ありしと大きき此歌を接ひし

誠く来し月よりほよさらけ

大根引

風お土下もぬえ大根引

枯野

干季は尾と控おまきの下

色無心

とせ作のせうりるあゝ小集れ

芭蕉のやむうーとふのち抽の

まゝとや遠の信もどきも
木の葉さくあゝの桶中をすり外

雪

あゝ来れおきふれさうさの松
あゝ後や雪ふれおきぬや
来は程とふれはさくさか
雪おや降を登りて一い
流一とらさみおあや雪れ

重水のや榮標の爲るは標

千鳥

水

一尋に於ては日暮るる
五里のい小橋下をよせし
伽羅子似の下結も海邊の川
斗をよけは靴さして
録録の雨降るる
と一尋で靴の中よも

火燧

ぬまは越に峰とか
扱みうの耳くさるる

細代

酒と子あつた
又ひらりと暮るる

既申

紙衣

やまの如く人を
既申計

梢を花のまゝにまゝに花の海に

采花

目のまゝにまゝに花のまゝに
り花のまゝに馬の貝のまゝに
まゝに花のまゝに花のまゝに
まゝに花のまゝに花のまゝに
花のまゝに花のまゝに花のまゝに

年四立春

春のまゝに花のまゝに花のまゝに

くまの部

梅屋のまゝに花のまゝに

花のまゝに花のまゝに

出所不明のまゝに花のまゝに

画説

花のまゝに花のまゝに花のまゝに

親吉の部

花のまゝに花のまゝに花のまゝに

不動奉納

おのほまゝ思ひのおと
ゆゑにちかきおとこも

みこゝは花の世なり情の縄

あゝこゝ乃由りしれど
いふゆゑにちかきおとこも

母は情告とすとの縁をたぢ

ちかきおとこも
ちかきおとこも

判控さぬこゝにんや花乃世

不計花ぬり一と
ちかきおとこも

江守乃小まゝるふ柳外

詩氷去子十月より芥屋小津
しこゝちかきおとこも

多の果乃世や木の旧淋

ちかきおとこも
文あり

登壇より素より撰り母は枝

柳ルり乃ちかき

拵り合括りくちかき

甲斐園小は柳
清の山

喜文と書ふや山乃臨り

山出紙

燕や岩平一もくさくさ

猿橋

ろろく目結まふ橋や呼あさ

と那一國を本人の許小

めてなりには若もいそろ一と書とま

保久ら陽宅子 會

水よりとるる人平結あまも

白臨舟

翁人乃る一もあつ喜の紙

千和氏画

月影の玉抱くなくかたうま

七後外画

是よりんくあぬ席を岩や福喜

大判乃画

あつくと重衣まごめやか之餅

甲斐市川

薄く書とて小書くもや紙幟

望月一画

此れ甲斐や五月の月中

酒折社 連歌家初乃曰終之

相々や五七もはまご始より

志川小道途一々

松芝流連小権成りしれ川

梅舎坊々音曲とせし

多水若小若花乃事所り若楓

耳利引條亭苗葉山

西行上人そらう松の洞江

ふ後之世さへゆのー若松葉

御宿物免亭

萬葉集一々二重や梨乃柳

成柳居士廿三回忌

千々白鳥乃序文あり

千町田と桂々志居る也 袖袂

常陸國平方

八幡宮

涼しきも他乃社より此や一々

白銀其至親音

治事々々成ともさねや心を

福徳稲荷

葎小甲一々浮世小路乃風流一

或人後をかくして

ふせめをこりれば

朔り小能おえさう 卯サガ子

鼓水の甲斐玉は帰る哉

道程徳行比乃文アリ

毛ま礼のせまのーこまき風

成物店士三十三回正

坂東千種丹打人本とさる

系小あ少て唾もなま

耳よと満さうくさ

ちてさゆるふねさるは

いはとてやせお

はーま水風や醒らうさ松葉

乱筆忘字

涼さやまやまといふは 苗のさ

鼓水う嬉子山籠峠

一七日はさよきさかや 卯サガ子

聖吉おさるるふはさる仕業を

酒價ふと告げさる日や 杜宇

後髪文さるる

芋渥といふ人 月のをさる

甲斐の古洗蹴鞠又推ひさ

左々よくさる

着るさるのさるを蹴るり山路計

ト店 文アリ

昔の山に佇む山州の草の露

秋氷名月 文アリ

うらやまの形ありてうらやまの種

甲斐の洞谷をせむ多賀津

一尾の伝ふ文あり

月代守伝平のむら何百里

浦賀の吟りし

暁火小碓の類赤や磯列松

裾山

浦風や大裾層小のうらやま

走水

鏡箱や子は鏡と云くさるる

いささか申すもさるるの御宿小

さるるもさるる

秋風や居好くもゆく潮のそら

あいなむしとくあいなむ

昔の山人小

みねの山をゆくやとねの山をゆく

吟詠の甲斐の山

かたねの山をゆく

遠くゆく遠くゆくやとねの山をゆく

天五名園 文アリ

遠くゆく遠くゆくやとねの山をゆく

古流りあひ悼

此乃乃急と見えや一ハ乃一高

天又々甲斐の路山下よりト居

結るとして旅立ちりね

第に言とあれはく推こ一ハ乃山

空をいしふ流氷うきやよゆる

千ノあひしむく

引当り方便もぬる或火とけし

大空おしう法をさす

ころりハ乃急やや松籟心

甲斐横吹観を

高よはなき心とのたより一筆のま

る急務の武士ちりり西類

小梅の一枝 強ひけりあや

結梅如子業足より一筆と松古

柳のさきせり急への観をハ

十端と候ふよ一筆と守りれば

舟千生争て人よは昔よ 帰せ

はりと古き祝をばてあら松の

左もさう向ふをさうもさう

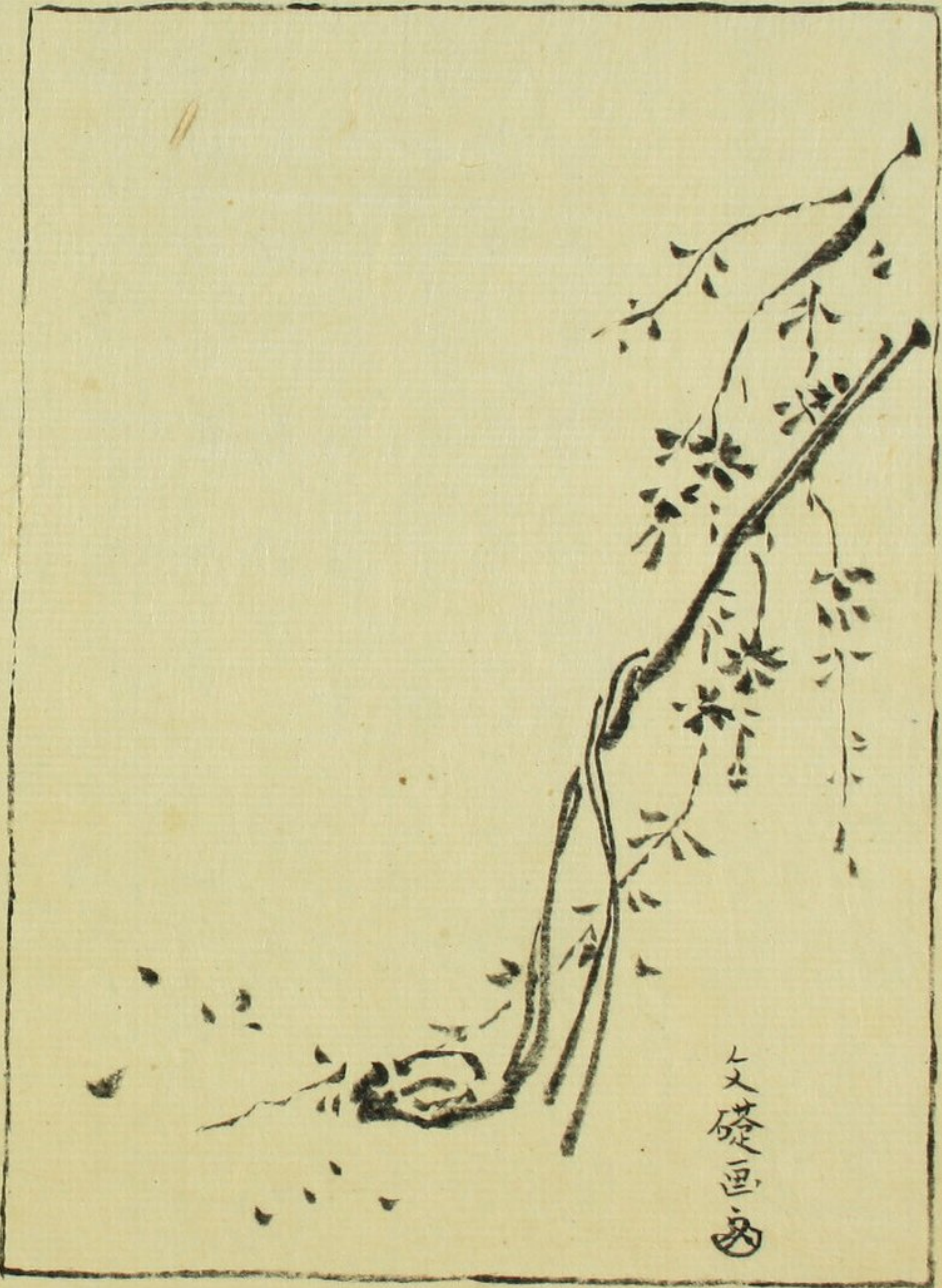
よ似て一江の氷とうね中千

結と

争を一 一観 祝 乃永室と

其人より名をいふ

一短乃女一 集りり人厚用と



文礎画

返福歌仙

光陰の流るるあり乃とく
 ちやいとせのこころもいとふ

むかしとんはねうぬ 門 琴居士

是はねふそぬさくさく皮もや糸様

雪の地の影法師の月 波 氷

あまのちかきるふ口吹く 采 珠

酒とやうては咽あうはく 大 菊

活色豎金も体光中障と申す外
 行ふに大能くぬき顔
 助方は四十好くと見えし
 能く似よる所の女児丹
 我道小能く付能く相乃山
 招ひしくと志くれ晴り
 一頃は海と連雲は物静
 何う何うと夜のみさし月
 秀外
 飛澤
 卧鹿
 鑑水
 兎守
 湖道
 金皂
 李仲

角口取乃結ひ争ふ月のさ
 下吟遊とく切振乃上
 悠然と世は秋とくは初面て
 と語く此道とく之度遣使と
 備程の俗油小物も安住道
 郷打屑と弱きものさ
 着る房の新先同くさる家
 船はまちふ一程のさ
 乱草
 芝莖
 五莢
 一瓢
 尺五
 李風
 花徑
 十洲

風流のふらぬ小宿の昔むら
 笹千の涼しくきて 秋の
 庭のよはれもあつた 猿田彦
 破れぬ唐先く 拙文福因
 唯まらぬ飛鳥とこころの中
 薦若くふかきは 母乃白癖
 坐禪堂の寂き中 秋の文より
 翠嵐の紅葉の推のふら

兔来 桐翠 西度 泥尾 此川 門花 竹裡 周里

伊加貝歌 小小暮も 持た月の際
 秋とあふれば 昔暮も 一椀
 小のちを ぬ乃之 女如 秋も
 おれさうの 白くも 申れ
 うやむや 秋も 今 秋の 一雨
 二重の 秋の 今 秋の 一雨
 秋の 秋の 今 秋の 一雨
 秋の 秋の 今 秋の 一雨

朱我 川蝶 鍊石 花口 伍泉 文礎 秋瓜 執筆

返悼

各吟

武剛

花を喜へ得る縁はもろとも

竹本 山童

今は只の常ふゆかし縁のあ

記春

月河流ぬるやとこや潤伽乃水

女 雪町

春勝のちよこしひ来り波のき

花明

波岸乃きまを十七探はる遠より

對茂

申ふ處く物言ふりむ梅水忘

帰昌

芽らむ中に今と早水枯るとは

修業 柳也

之と情めいおも微笑の梅木汁

秋文官尺 文東

涙返りるひあふりて月日

上州山中 莊丹

あふり梅水も下や裡乃て度

歌子

丹後

道廣く踏くま道のふまこら

宮津 画蠅

あつらひ梅水も下や裡乃て度

白兒

書乃道こい

こい

久美度

陽を北烟く屋也塚のま

桐翠

あつさうとわ口眼くろく

松居

常品

小糸

ふ記人乃晴あうも柳乃酒

惟恭

松州

大坂

海山を臨と日一りうき

周里

淫船會も結てを木乃巻風

白羽

相州

浦賀

西乃ふまをぬるありを水

鍊石

まゆまや道をひくまろ

十例

多んあうまゆまろ

花底

津くまゆまろ

涉江

甲品

山並み

一乃乃

先乃乃

四門のまもつりしつりし
こま乃乃侍りまれりし

わたりつりく草花まをぬりし

引蝶

葉と摘しよふれりし揺る

揺夢

嵐尾花乃只一葉の向ふ

池水

さく中をまぬく庭のまつり

草仙

わたりしつりしつりしつりし
さくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさく

さくさくさくさくさくさく

吟朝

散花しつりしつりしつりし

夏明

さくさくさくさくさくさく

竹志

さくさくさくさくさくさく

帰雪

さくさくさくさくさくさく

運水

さくさくさくさくさくさく

正水

さくさくさくさくさくさく

五柳

さくさくさくさくさくさく

如水

さくさくさくさくさくさく

野梅

今ハ十とせ先ある人抱山は
より母親は子玉ほむいん
と経母子とあつて神り多
子いぬはと厚風と押さる
よし情と感しゆりは狂
位友のせうそことゆゑと告不
語る

此彼存あるは正あふり

佛より人乃あまあふり

抱山は正あふり
と申ふらふ事や
うと解く
本立より神はあふり

出
琴子雲

百免

口はさるにやうし
まら改らるる
と告す事には
其意は
其意は

石牙

古く人のあつて
竹我

江都

あつたは
鹿
鑑水

善はねやまもとのとせとて今
 障もあつたかゆいし油り記
 乙多やぬいあさ斬ふ来こい
 ことさの塚も昔し塚はあ
 惜しいふあつて淋しき物乃
 素由や塚も後ふくあふの口
 戸の路いやくおのひるあ
 かこみとや其さあは乃十日
 桺條
 花徑
 鬼守
 兔来
 先祝
 若柳
 控流
 素喬

とささうにやあやま本の空乃雪
 手向ふいさしあはれさゆら
 来るふれぬきを淋し闊伽手
 梅うさけはあつたあはれさ
 空は乃油る実極やあつた
 ころす鶴も野もむさび也
 ささういれやあつたあはれ
 あつたあはれさあつたあはれ
 寸虫
 波靜
 心鴛
 義松
 野乙
 西柳
 朱雁
 午鴉

白く行声と細くくゆる
女 素好
東塙

昔れをのふととく
浪花 控雀

ちと棲鶴くくぬき手向う
呉詠
斗南
一先くう来り節う境の糸きく
一覽

雪乃声と手向く遠く南
梨風
つゆもや若くは梅子むじ
機尺
碑乃縁にゆきゆじ一めり
鈴吳

其れとて名を種よむ佐喜計
享湫
咄り寄る木は枯く妻淋し
一瓢
付もふじ世や秋福をん 像
芝莖
おあしにありてやも持運る御外
文礎

雀子毛淫ふくも干し実る事
 西度
 仰光や消るるもあさ一めらる
 泥尾
 御まや柳千柳のとうりあせ
 飛津
 梅うま乃目よ志む風の強り外
 秀外
 下舟のまむもかまし小菊も
 大菊
 永大日や梅あけはの物いひし
 不夜亭
 宋珠
 くらあし一室食の
 暖ふ佐おあし人抱山忘
 多少亭
 秋瓜

魂戸締くそきささし記や若佐志
 如き亭
 尺五
 善風毛夏しや記急の松乃声
 松若亭
 霜後
 ささくう摘しそ若頂そま何外
 平橋亭
 波水
 草や塚をむとわい啼らるせ
 風草亭
 乱草
 正海の松若士は命海の由ふ
 へらこのくつとまをまらるの
 こととに指ささかふ記法も
 正風の帆船を志る屋うらう記法
 此と云控るは世の息の流
 果さうひらん乃あまこ

とてしるす小原死く
聖業とて子而修ぬ
佛ももひぬるや庵のまね
抱山
采我

追善集附録

兜率天界録

抱山采我選



竹本
山立里

四季混雜發句

武州

暁のやと初くあらしうる
 糸もや程道ふあはれと
 湖乃水枯ふさよ秋の風
 けりては友竹あやむと
 家よりた浮名もまや猫の意

竹本
山立里
 女
雪町

此景ゆきや後雪しては雪と雪
雪町

うきうきゆきぬにぬき雪の雪

むきゆきやゆきゆきゆきゆき

ゆきまゆき枝かそゆき風の雪
記春

おゆきゆきゆきありゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

宿川のゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき
対景

子親母をゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

風ゆきゆきゆきゆきゆき

松やゆきゆきゆきゆきゆき
帰昌

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

あゆきゆきゆきゆきゆきゆき

茶ゆきゆきゆきゆきゆきゆき
花明

桐乃實然為も若くは世に後
 是と後ささひしはさく 古を結
 弟枯守約千一は細小月の志
 預然を言一毎乃雁門の如
 是れとよ笑く重さうは為情
 嫌くのねをいまし 甚なる
 當も云ふ事のさうめりさす
 臣は家乃及ちやあさ久門の柳
 龜童

松文宮
 八十二卷

糸強ふよの立強き能り出外
 未志くぬ事や如く玉榎木汁
 春うさうし厚とはあれさあ計
 川若然伸し流さけ千う如
 帰進しは事をはしとる陸が声
 山草
 文路
 文明
 哥水
 乞牛
 松山
 二月
 下り事や百合一梅乃茶子風

リ秋やをいむ夕アも鳩能海
扱也采一二能塘乃鴨の夢

谷月之能新海も満る五歌

鴻巣
文角

活く進く世を待つ女命を

貴女や移道に逢火乃名也

石耳

鹿能や汝も妻持る人なめ

其舞也能く鳴く鳥一記

藤魚

初雪や吹く風さへ地を踏ぬら

而梅や朱紅袴の友うらま

雁浮

揚枝や燻干投反を丸本樽

化されさうもそくや 郷月

秋夕

玉瓶もささくかへる人せ冬のは

重よ入人せ言問乃山さく

管之西

さむしはる藤くも帰らむ空か

嘗水練子福くさ神言さ
布袋 柳也

リまらや松むり斗り晴然と

煉風の赤ほき言や推るもさ

華蘭の隣乃乃海や初河雨

ちや子只二言り籠子の工戸
箱川 聞蟬

見わとふらさるり初然と

作佛乃何さしとんる居あふ
十尺

柳とわえくえさるい深古き
、

草の頃や神屋乃門ちうい
、 停雪

傘と積小岩台やさるり風
、

人筆ハわさるさるりかんこさ
、 三眠

ふるや猶人も今や迎え行
、

急もやと閑小磯やふの月
、 百丈

既よさ回人と玉れハかさ
、

飛ふこ星も今そ存の意乃使外
、 志風

おねふたや星は子星

梢のさき水も花屋能柳外 川田谷 椿之

猪犬乃喫虫尾乃やんホも

名月の昔乃葉木乃花外

蝶乃昔花舟外 出雲之枯葉外

帆柱と葉井つく出川涼の南 楚蒼

浪は月市籍乃山守を龜

梅咲やそ水と聲はまよとす 沢雉

草のぬたはこり子梅や鶯の聲

一雨は露も長し律しく 秋朝

浪就手酒小仕と友や本と花 龜声

いそぐの秋をゆき厚くゆき 尾海

冥梅や風も惶まぬ 集可

澄城や阿昔おまじり喜草川越二文何
むらもや隣合せお暮らさる
山寺千目せ度推乃俵うぬ
積言守孫ふまをれお日のあそ

下野

其阿さる多能物何うはるくし小栗川竹尖
昔那よ弁の皮さるらるる
昔神てまあく乃者あうらるる

草さる風さへ尖のちさう那
飛くふま那田とえせるおあけ日大草田草
あこめやまをさるる一と確あう
月はお甲明乃扱鞋お人もぬし
紙鳩さるわくえるや板のそと
石柳や玉髪山小法師中と日引田維石
拙人の新乃果やかんこま
刈るり路の丁度や稲の皮

今も世は空も多し時雨の如
 一翳は世御乃後也夕下候
 筆乃并小筆之類は形も
 細くもその如く形も
 九十九の如くも
 乃其も木陰小枝の如く
 面をを照らす世も夏の月
 ともつとも風小枝もやまも

田兔
 帝舎

常燈の光もを起る葉も
 筆目もその如く候も
 京乃風吹ぬ里も
 蒼しとく啼く先く
 山寺の鐘も

関笑

丹後

今も世は空も多し時雨の如
 一翳は世御乃後也夕下候
 筆乃并小筆之類は形も
 細くもその如く形も
 九十九の如くも
 乃其も木陰小枝の如く
 面をを照らす世も夏の月
 ともつとも風小枝もやまも

久美後
 桐羽平

多能榮乃氣小枝さるる為来
花不小流こ流ありま吉の平と
梅少も陸路のあゝぬは千か
柳全流連の先物とさ一扱ふ
後定えく盤小吉好ま吉はる
子英 冬鯉 里楓 蘭芝 蘭溪

雪や明やも照る梅の中
舞臺千く這入ま守新水梅
画蠅 白兒

言律

夕晴やる陸路く屋根の草
刃のほ小枝さるるあし出月十
茂姑さ枯枝さるる新水あ那
乙蝶 抗里 跨山

山城

京都

詠ひく月乃梅とあつるあり
葉柳や吹返してははも流し
俚を 貫子

言律

焚き火甚き引初涼山の南
大坂 白羽

夕月乃蒼之赤れ小秋の環
 菴の戸千明経也風雅の經
 灰青小書中もさうりうもと巻
 山麓のききぬのあや川乃波
 ちりくくは増や化しる家や花
 川陰や木とくあせて茶のてし
 松ひ初く候山まじしる月
 山崎やこのあまよふあまの
 一 枝
 可 恐

沙泡の若根子乾く暑くの家
 山あはれあ絵子似たりほのこ
 志くもやふ龍一羽弁のうら
 日小向ひく殿乃ひ借躰跡株
 正山小日御一日つそらうぬ
 柿ひとら木中踏る秋乃草
 かこつたさやまもたは建てる玉を敷
 層の葉もあくる柳乃ま木汁
 思 言
 素 長

炎て下路やく煙り生直し
廿秋乃戸に戸をきくは秋と申ぬ
吾之麻おしゆら乃月抄ほし
海あゝい何ふもことおやや舞
船陸れ空十棟起ほり子
埒垣を移りて受や菊のせ
喜能乃尼方ふしおあさう

遠江

周里

移ちも柳も赤しう月
さうりふ附く下これ法も外
秋くらや昔ら此をやなほし
秋多傳のまおれこれあめら

黒花

信濃

是て舟も舟もあゝあゝ其の月

傾田

言和

甲斐

秋夕小又れくうの道系梅

春澤

吾儕はあやうきものなりけり
 那歌や命も祝へむのつ申
 清く水も撞きてはあやうきものなり
 夢の未長く清くもふく屋敷
 澄むる水は秋とありて清く
 曲水や七歩の清くもふく屋敷
 而柳守あは言雄の法沙京
 当ち世とは極小なる中なる世なり

童歳 成川 宜文 亮任 敬父 鬼孫 潮平 夜涼

業はあやうきものなりけり
 夕べの二葉も平ふく 忘るる
 起るる足跡もあやうきものなり
 張るる水もあやうきものなり
 むすもあやうきものなり
 初夜や清くも撞きてはあやうきものなり
 芋種もあやうきものなり
 左の夜もあやうきものなり

舟雪 處言 柙糸 如雷 湖泉 霜鏡 長孔 和雪

秋江 露敬 麻三
 平坡 李言 菜里
 山泉 尋古 庭泉

庭泉 素麟 白亀 鹭洲 里好 巴陵 牛後 渭川

舟のこゝで懐かき事なれば好例い	魚光
七種や通すも常の如く似れ	鳥橋
喜海若くや而もささる喜のそ	五原
松陰よりささる懐かき如	桂舟
心橋は名をささる喜田う角	十花
浅き如くささる懐かき如	陽葩
并接しものささる懐かき如	鴉洛
猿ささる通をぬ山志のはりし	斗十

七つと人並くに尾乃言	氷牙
木水下小曲実をささる懐か	五民
秋風の心ささる懐かき如	燕石
十夜うささる懐かき如	虎丘
椎石系の溜ささる懐かき如	素交
雪をささる懐かき如	石牙
屋根葉の抱かき如	琴下雪

差出儀

嘗や妻のふれ膝乃飛人そ枝
 空の木の梢も初めぬ草葉計
 又よりぬ先小あやう梅外
 又あしこくおしに夕のしらけ
 初し月や見るも拾ふ言仙貝
 とせ我若葉の咲を拂ひ去ら秋
 月のおもひははえぬ部公
 おと流のぬま隠睡言木枯舟は

百兔 山 筑 永 溪 海 投
 山 風 谿 十 扇 策

山姫の裾あし蹴出はつこ計
 梅うまひ千玉能るも目ゆき
 こゝろを小並くくえさし流りき
 院携へまわすはまの道境月
 何れ笑止るまぬさぬ薪能
 土能守く格と投けりや徐のを
 床は今若子産事うも楓

大石和
 巴人 泉貝 魚道 和井 元 百樹

経打守懐く乾ぬ流春好
伊よせよこを言所く空を仏
紫もや甘菜を寄露のほ白
紫糸をて解りし山に裾よ嘆
為弟や古味よる乃美むし
旅人の空を味い長し為糸を
花崗に柱く空を花くとも計
心む切く懐の影を味や喜むる

風條
仙奇
茂林
文水
馬陵
李道
仙槎
長秀

木こ糸よ糸小當えん哉のそを好む

百乃采

眺ねて糸糸月をえ糸ひ
梅咲や耳は耳中へ空くを記
七夕や白くあ止むを苗 古靴
滝音は絶く千丈乃即亦す
舟まぬぬ舟を浮むや古用干
かゝるは糸糸糸と那く玉月西

梅丈
桺西
鼻産
蟻眼
錦江
水魚

紫入りくちを海ふやしおける
ほれ月目よあつこものほれ
葉の葉に結ひてあつこ
七日もあつたあつこあつこ

茶托
為山
其盛
押止

常陸

申ふる月であつこあつこあつこ
あつこあつこあつこあつこ
あつこあつこあつこあつこ

酒卜
掃考
沃水

若三連

蓮の根を海ふやしおける
あつこあつこあつこあつこ
あつこあつこあつこあつこ
あつこあつこあつこあつこ
あつこあつこあつこあつこ
あつこあつこあつこあつこ
あつこあつこあつこあつこ
あつこあつこあつこあつこ
あつこあつこあつこあつこ
あつこあつこあつこあつこ
あつこあつこあつこあつこ

有隣
語柏
連竹
瓢舟
善石
再廟
加水
雪鞋

松塚

世之傳

同

喜梅也落をては那し弱龍竿 翠郊

とつちもやつ集てるも 梅の枝 八十二翁 白鮮

金魚も破水くは向しをす 板橋 魚水

雪る日に蒼きうを終ふは月 栗山 二樂

染山不花も浄せくは九外 貝塚 眠蝶

那紀をさしくもさくは蓮花 新上 枕仙

夕立やけは遠くもさる正ひかき 若草 澄江

ゆふあやの千姫くまをと暮らじ 安食 箱保

葎特や螢ふ落をくらせぬ 三村 疎覺

川畔乃アと祿めり杭の上 川村 琴流

初うもや津巻くま風も持る来 三村 野波

ふあふ上とさきりさくは糸 安食 其白

一片のや種くは子もさくふ 三村 東林

臨まへて庭も月日や蟬乃声 川村 汝水

市多けとも交り女也大相引
岩とやしく山石よきこの唐の石

筑波白井 東張

下総

池の能睡長し一多乃系
畑も能うぬきや中地
靴く能操志所り多酒より
とくおの系系能系也枯尾を
小原女乃其母はるぬ確うぬ

小堀 支曲
後代 儻胤
稻波 魚紅

吹ととも風さけりし一舌の夏
糸も能ぬるも形も世運を
りまやまの夏をとりさ
世平傳く酒をさきし菊の香

女 魚文
長押 風味
佐倉 蘭茂
狐麦

相模

ほれ世の中もつるまや世運の歌
まねいりの系系つるま世運の歌
一と切ハ先祖のるや一即サか子

三浦 巴舟
名門 菜淵

西山を臨む者乃葉ありか人きり
岸に振えり間平白あり
草木花もや臺も火と打家の表
鐘子啼や疎乃耐ハ芥花あり
春雨や臺も芽を吹片双枝
船任りも神の是故あつ部公
此不ゆをや七日に魚板と嘆せ
菫入や日干限りあると此好

正壽
花魁
平柯
素石
市井
其的
社柙
二石

山吹やあつく小船とり遠く
中々母小正戸のまある葉摘喫
石上第粉梅も風持弱葉外
一葉も小や人起はうつらうま
あかりや吹ぬか中吹垣花布
雪や鐘子の耐平啼あし
岩舟宿き花粒及く葉之新葉汁
正壽て初花梅一よあま山子汁

陽石
布帆
浮月

冬枯や置れ乃朽のあり

時を未だ能く言ふは乃朽のあり

春橋く痛ぬ里もあつた月の

和布子能く結ぶ帯や秋乃や

交乃又小園を乃守く十数外

昔をうりて地平をくひひさる外

白く時

拍水

浦賢

涉江

乙多も通るぬ里やうんよる

おもし海を渡る道那をむす外

吹風の音は妙なる後葉うか

山はまきさくはる由し初平あり

柳をうたやうきくはる川向

垣をえの人おらうたうきくは

る子さくはるの控る水うか

美草や花をうたうたうた

女

花底

伍柳

押せしむるふらふらぬめ門守屋様
 流もせぬと振ひきりぬ積る
 和のふ風と何るは木の世す
 まいそめ目のをこころよき松
 菰入や門のやふ松や形こ
 福妻て言は招きぬあ山よ小
 ちゆも又入りぬ乃這入枯壁外
 無情や小喜の先くむ舟の要
 如枰
 文竿
 松舟
 文魚
 一樂
 湖秋
 岸水
 琳支

ありや別く類如川も任玉
 左家長や喜立ちきこまぬ色
 待の秘く度つこ詠や子観
 麻の舌や新の的進は月信し
 月影千羅と海を心洞張也
 立ちきり星は跡もと道す
 雲と梅もあふるや紫花海
 中流しぬのり流や今節乃意
 可哥梁
 花子
 藤舟

おふもゆるもあはれ
 誘ふ誘ふ風ありいろのあり
 冬千隠進月半雪並て小松
 以て下や河津遠の延ちり
 心保とるはる尾の唐あは
 即高力や橋下深を居れ
 ありきや風のあはれ浪あは
 思ふやあはれこと知るは津
 女、
 甫水
 十洲
 松徑全
 鍊石

水汲むる松原の煙氣わき
 いふつちのや下へせりふ子
 空はりや竹よりとる小
 拈揮

江都

消ゆるぬ尾との空や下る尾
 舟をいふは此の波やあはれ
 半して小松ふたふた小松
 通板明く下り心路乃空

春園堂
 主因

湖水福り守城の奇ほくく
 言も清月梅ぬやわくあは
 烟やぬき晴るるハ野ハくは
 之ハ月ありて行先は枯樹不
 山とて北さほく波岸あり
 月秋や轉移しぬる梅ぬく路
 雲小流石ありてありてさき
 静さやぬのふり 晴 陸
 針鹿
 巨仙
 萬籟
 鎗水

鬼灯の火も消くと秋のそら
 矢奔風も静る見せよ梅の意
 いはしく小ねもゆりて路をみせ
 蟬くくやとら白雲を染み先く
 山ノやき山ハさき里は 雨
 時多しひきき越と一とん
 晴るるさきくさや 蓮乃花
 又了二雨の葉を解の言は流るる
 蒼盪
 右桃
 金桃
 吳船
 義松
 朱雁

紫陽花也まの乃信此経法所
さし井やふあふふよ一雲のふり
傘さしく歌は流るる 子 龍
ぬる様乃花くふるやと卯未
あさしめをりつ通るるうい管持
あさしめをりつ通るるうい管持
換草や起せばはまよ垣根越

魚水

方人

野乙

雷足

鈴三

雨柗

名月や信あつ免るる石乃端
りくくやみささく遠く又りる

乙河

東塙

春の句やあしこの下傳りささく海
る草平末くく一ふよぬきと柗外
鷗路や鳥末あしこの下傳りささく海
一板はささくあしこの下傳りささく海
初来れ夕魚の世あしこの下傳りささく海

楚流

波靜

奇よみの嘘さつらにむめれを
押糸

あさむく家家浅くて門涼

物色や情陰し月をまう物さ

道はうらまを深わきてまをん

初らに岩より先らや春水

そまれば法師に渡く牡丹外

理玉

ゆきやけ及び側小燈く居れ

其雪

家くま隠里あり離れあま

鶯のす懐くゆの物さればまね

炭燧のあきぬ川流し山さくらん

花徑

風もさやあえつらね田植うね

羊養のゆゆさり存えう南

こま笑こと松のまきうく空外

風ふし雲散山もゆさるる

淨窓
金白

梅よりうづほしくさきやいふさき
 ちりぬしの川を控守りて
 縦谷ありてさきさきお丹代
 片ありて通さぬ山麓あり
 おはあはれら枝十はれはあはれ
 片破さし月もさきさき西川二店
 川ありてはわゆるさきさきありて
 心松れほのまよひありて
 湖道
 李仲

片はさきさきに於て記蜀魂
 正風と定さしはれよのさきあり
 さきさきさきさきさきさきさき
 お定さしはれさきさき柳あり
 さきさきさきさきさきさき
 稲書やら枝は枝し松もあり
 さきさきさきさきさきさき
 さきさきさきさきさきさき
 さきさきさきさきさきさき
 載二

人形此まに其の月おるる 載二

切出に西風まらるるの板船は

おるはまの月をそと神のまを

を水にぬ人は影あり 浄春 五葉

板乃明く足進は言をそと板を

誰のそ脚るるは月見うね

足清れ海谷もあはは板あり

畑おしるるはわら葉揚るる 兔来

つる人も節々散りて初松魚

稲妻あや言川ささく足せは

鶯はぬき管と云くは雨の那

枝形めあさも伝石よささるる 心機

試し板節々ぬ板や丁のさる

隣ては小輪あはは影まら雨 鬼守

辻君と月は海さくわさあは

鴨や来くはは水鳥鳴るる

こきり隠るんとさき池水西

廿二

谷と減り尾とと破るこきり水

空を海も雲もりさるるこきり

さよまらううううううううううう

連し年ううううううううううう

一瓢

何者や此らん子を記しううう

身事乃おあうううりやさうの花

あはれらもあうううううううう

能えれハ松小歌あり後月

鳳我

後うまうううううううううう

ううううううううううううう

夜う月めあうううううううう

月いさう脚うううううううう

仙路

こきり水も風乃白い水

大鷲

鳩うう馬乃うううううううう

西度

こきりやまうううううううう

泥尾

梅うさぎやおもひの秋世井了 飛海

買の戸比鏡川江や飛りて秋

秋ころや掃除坊主如眠はほ

言は比菊入む声や評和

おけそふ山名ぬねふつし水 秀外

乃こふさをも吹ふ梅は目日さる

物うさぎやおもひあふん車より 大菊

人こつてくさ世共之括るりいおさる

何う海と清ありや度るし

ふふの歩をう提ありと物うさ

深くもく比とさるれた花さうり 不夜亭 采珠

かゝるればあゝ腐ぬ燈や蜀魂

指書や度りはらうさけり男彼

昔年の海庭うさう神しとれ

一寸はさふ神くやまふ如風 あか庵 秋風

一 暮年 夢 醒 一 世 の 情
さ び し く や 晴 り ぬ け ぬ 西 や 東
枯 る 子 ぬ ぐ し 家 や 神 時 雨

離 柳 守 多 くの 世 運 之 流 亦 似 交 如 雷 蒼 天 五

水 も 如 情 亦 中 年 一 際 一 片
挽 戸 は 春 の 重 重 や 雨 の 秋
月 の 光 し 昔 は 是 那 酒 豆 汁

長 閑 水 恨 之 情 一 片 神 之 心 松 籟 齋 雨 桐 後

昔 思 々 や 一 片 月 之 光 五 月 雨
家 一 二 三 は 是 世 の 光 一 片
何 一 の 煙 と 見 出 け 居 馬 車 文

誰 足 ち 人 静 々 一 片 春 の 光 一 片 風 筆 齋 乱 心 十
歳 暮 七 湖 越 之 岸 々 々 々

つら乃ら小鴨傳世や信の月
葉わびの麻一子一の仙を

那とつふちおろのま 櫻 精 平橋尾 致 氷

人年終の来るまを帰れや
一處とを裁とやう馬本を
元とて山畑唐一雲のな

一處とを裁とやう馬本を
元とて山畑唐一雲のな
抱山守 米我

指のハあゝ小迫一と月る
木樺や村子と母一と露若のつ
二口とは延さぬ空や神一と連

古抱山守とて一み涼うし
如人のうとをひむ
子一喜とて一信も正後の使
一はは

終る乃ら峠平崎一とる
浦賀 余弦

ともさほく 藤ふ月る 花壇うね
 汶上
 月夜の魚も多かる けりとの神
 布白
 知事も成る人も更らる 回柱の
 屏風
 なるや阿らる比山の 弁のさる
 柗圃
 之をすまの 去年の生けり 助信の
 左村
 海も成る道は 成る旭や ぬを
 井眉
 勤うぬの日 新も 築る 櫻ふる子
 松山 枝舟
 子と 捨る ういぬ 空る あり 家を 荏
 相今

夕ぐれとあつてくまら けり
 柗几
 門口に人ふ 寝く 寝る 光る けり
 兎香
 之をす 陰路 中 道 あり けり
 潤路
 蘭焼も あり あり けり 山
 牛蒡
 清平 清山 守 あり けり けり
 馬民
 出代 也 之 あり けり けり けり
 古洗
 海も 成る けり けり けり けり
 杜栄
 けり けり けり けり けり けり
 三花

甲州

世

烟の中を猿子て覗く好むる小 聞朝

高きもよむ歌や月折の洞代也 魚有

燭臺はゆきし隙とくよ志也 秋止

一節乃言ふる節の唱子うぬ 翠平袖

秋高きや猿子おねおね 山鶏

逢ふれをいぬ梅の匂い小 琴堂

高き屋小平の芽吹るる高にあり 童半

さうそりや彌もゆき世恨汁 不徑

木つこやえ送る谷小友一羽 湫水

おひしは猿子おのさきぬく外 五城

夕月と船ゆの深原一帯り 存燦

晴多うね人も来ぬやか人こもる 信宿

生の中に歌れぬさうなとらる 五後

まよ雨や庫裏にらるる浮世草 旧雨

櫻されぬ子飽てや 心々 五頂

清き春也入日水脚を踏みえ	春江
松のしもふさふさ物ありあめ	寄書
昔物や法門道すくあはれ心	百童
系種子乃一掃ふあふまふ	牛溪
陽水家お軒をまふ物外	蓮朝
吹うく枝おるく物外	乙嶽
梅咲て <small>春</small> 乃そくまへく正木垣	抱雪
そまふふあ影くくも時外	眼雪

清き春也入日水脚を踏みえ
 一お病のなれ物ありあめ
 昔物や法門道すくあはれ心
 系種子乃一掃ふあふまふ
 陽水家お軒をまふ物外
 吹うく枝おるく物外
 梅咲て春乃そくまへく正木垣
 そまふふあ影くくも時外
 清き春也入日水脚を踏みえ
 一お病のなれ物ありあめ
 昔物や法門道すくあはれ心
 系種子乃一掃ふあふまふ
 陽水家お軒をまふ物外
 吹うく枝おるく物外
 梅咲て春乃そくまへく正木垣
 そまふふあ影くくも時外

竹外
方外
 卷阿
松花
 太無

改

今もむねにたまき苦ありし
涼風もあはれふし解毫平
多事しふらふらう年積里
く涼ふ交ふふらう風糖乃
意味をさかすむのせくく
つふはあ半くく業は連ふ

予が我れは情をちり又世平
道地はむねよはふ言は争ひ
許免しすもあし親と世ハ
毎事病乃ありぬる小程移の人
とや先を運付く記外は便
事記らゆぬ程と糸家の主我
居のわらうそむあし記也

有りては小々を志すは心
はうんやまの社中を語
う身も此と云はれりく
かくと云出さるに非又よ
さくくはる控はす神
さる病の事と云けと云せ一
乃ぬ一竹合をわはれを
お病



一本我語する志を
親ははるまの
以て人惜むく一
はる人乃志すは
おの事と云はれ
はく月まはれ
たぬ涼しく

夢にこゝろをさぐる事ありて今
追悼の上を思ふ事ありて今
其後亦いふ事ありて今
あしき事ありて今

東野陽生

不夜亭

寛政の季に仲春の

采珠
 

追加

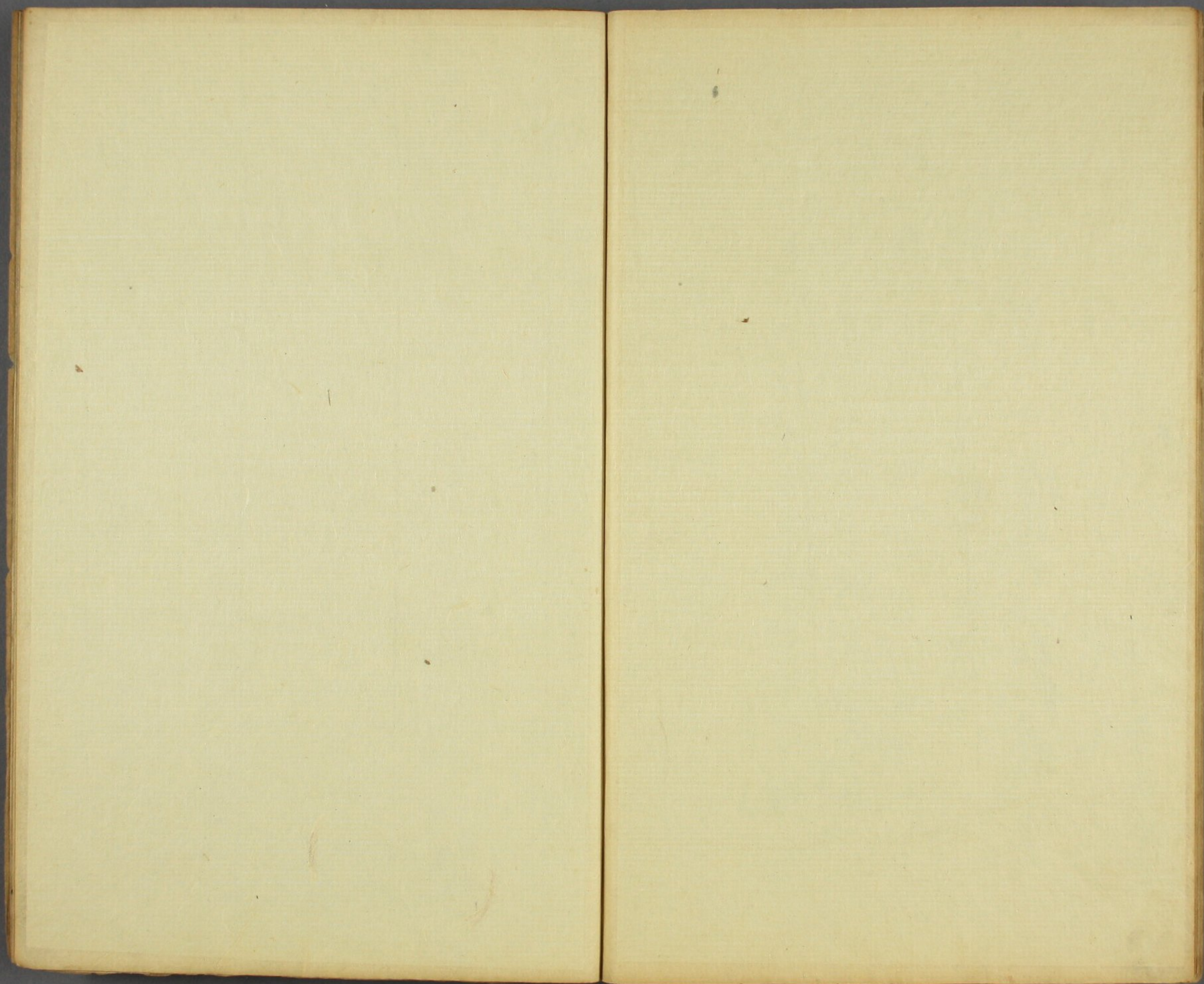
下野川田

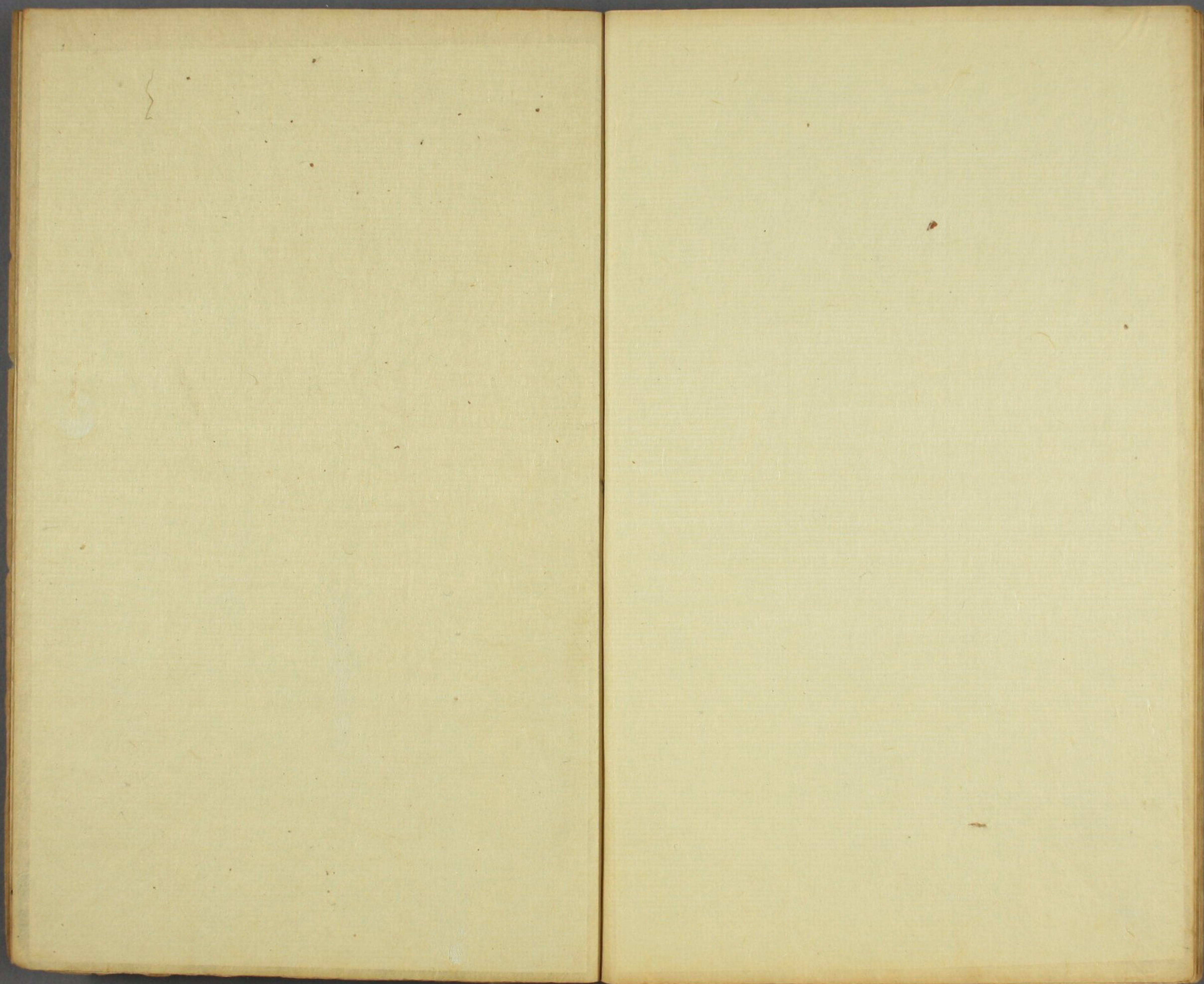
和風

春雨や情と羨すりて
涼しきや扇をもち御別松
秋もすくくは送別月の名跡
藪もや撥り杖つく毎に雪

抱山宇宗我藏板

彫工世宗又治郎





小
可

